企画３　人の移動と国際文化

「帰郷」とアイデンティティの再構築
――韓国における高学歴朝鮮族の事例を中心に

パネリスト　**趙貴花**
Guihua ZHAO
●成蹊大学
アジア太平洋研究センター
特別研究員
（教育人類学）

はじめに

近年のグローバル化の進展とともに、かつて、出生地を離れて植民地や外国へ移住した人々が、故国に「帰郷」する事例が顕著となり、注目されている。植民地化の時代には、宗主国が主導する人口移動が主流であった[1)]が、脱植民地化を経た現代では、出稼ぎや結婚、留学等様々な目的をもつ個々人の主体的な国際移動が主流を占めつつある。

故国への移動の現象をとらえる用語として、近年日本で最も使われているのが「帰還」である。大川（2010）は「帰還（return）」に関して、「たんに『戻る』という、より客観的、中立的な用語である」（p.30）と指摘し、「帰還移民」という用語を「一時的な訪問ではなく、本国[2)]の国籍を取得し、定住を目的とした永久的な帰還を意味する」（p.31）と定義している。一方で本稿では、「帰郷」という語を用いる。本稿の「帰郷」とは、かつて出生地を離れて生活していた人々及び彼らの子孫が、「故郷に帰る」という安らぎを求めて、一時的あるいは長期的に故国に戻ることを意味する。なお、本稿の「帰郷」とは、必ずしも一つの「帰郷」先に限定するのではなく、「帰郷」先が複数になる可能性も含めている。本稿では、このような「帰郷」によって人々のアイデンティティがどのように変容するのか分析する。

本稿で取り上げる中国朝鮮族の事例は、彼らの韓国への「帰郷」である。それは、「同じ民族」として受け入れられることを求めてのことであり、そのことによって安らぎをもたらされることを期待する移動である。以下では、中国朝鮮族が「帰郷」した韓国[3)]において、どのような社会的排除と包摂が行われているのか。彼らと現地の人々の間にはどのような境界が作られ、そのような境界の中で、朝鮮族における「中国人」と「韓国人」との間のアイデンティティがどのように揺らいでいるのかを、現地調査に基づく高学歴朝鮮

族の若年層の事例を中心に考察する。

1．中国朝鮮族とは

中国朝鮮族とは、19世紀初期以降、朝鮮半島から数次にわたり中国へ移住した朝鮮人及び彼らの子孫であり、中国の国民として中国国籍を有し、少数民族としての法的地位を獲得した人々を指す。中国における2000年の人口統計によれば，朝鮮族の人口は192万3842人とされている[4)]。

朝鮮族は中国の地にあっても朝鮮半島の出自を忘れず、エスニック・アイデンティティを強固に保ってきた。その背景には子どもたちに中国の国家言語である漢語に加えて、朝鮮族のエスニックな言語である朝鮮語[5)]を教えるという二言語教育が重要な役割を果たしてきた。中国政府による公教育機関での二言語教育によって、朝鮮族の人々は中国人としての国民的帰属意識と朝鮮族としてのエスニック・アイデンティティの両方を相互にバランスをとりながら維持してきたと考えられる（趙 2008, pp.177-181）。

朝鮮族がエスニック・アイデンティティを維持してきたことには、彼らの朝鮮族の伝統的なライフスタイルの維持や血統の維持への努力からも見られる。中国政府は少数民族政策として少数民族の集住地区に自治機関を設置し、運営させることによって自治権を与えているため、朝鮮族の多くは延辺朝鮮族自治州や東北部における朝鮮族の自治県、自治郷に集住し、そこにおいて民族共同体を形成した。そのような共同体の中で彼らは朝鮮族の飲食、服装、冠婚葬祭等を維持し、朝鮮語を共通言語として日常の生活で使用してきた。そして、統計数字は把握しにくいが、朝鮮族の１世から３世にわたり、朝鮮族同士の結婚が多い、と朝鮮族の人々は考えている。このような朝鮮族の血統を維持しようとする感覚は、韓国においても広く共有されている。

朝鮮族は自分たちの言語や文化等の維持によって、国境の向こう側の韓国と北朝鮮においては、自分たちと言語的及び文化的に共通性を持つ兄弟や親族が暮らしていることを想像してきた。しかし、第二次世界大戦後から中韓建交としての中国と韓国の国交が結ばれた1992年までの40余年の間に、彼らの多くは韓国へ行くことも韓国に対する情報を得ることもできなかった。中国と韓国の国交が結ばれることで、朝鮮族は正式に韓国へ「帰郷」し、自分の兄弟や親族の人々に会うことができるようになった。

２.「帰郷」先における社会的排除と包摂

以下においては、第一に韓国に「帰郷」した朝鮮族の社会的立場を彼らの韓国で与えられた名称について分析し、第二に朝鮮語と韓国語の言語摩擦について検討する。この二点によって、韓国人と朝鮮族の間にどのような境界が作られているのかを考察する。

まず、第一の課題について分析する。2011年３月31日の韓国法務部の統計によれば、韓国に居住している朝鮮族は38万3077人とされている[6)]。中国朝鮮族の韓国への移動は、1988年のソウルオリンピック以降から公式に始まった。1986年からKBSラジオ社会教育放送は朝鮮族を対象とした離散家族探しプログラムを作成して放送したが、中国現地での視聴とともに、朝鮮族の多くの韓国親戚が確認された。韓国政府の許可により簡単な旅行証明書を発行してもらうだけで、朝鮮族の韓国訪問が可能になった。この時期に、韓国の親戚たちの招へいで香港を経由して韓国を訪問した人々が初めて韓国の地を踏んだ朝鮮族である（グォン・パク 2005, pp.151-152）。このように、中国朝鮮族の韓国への移動は親戚訪問という「帰郷」の形で始まった。

しかし、1992年に韓国政府は中国朝鮮族に対し、親戚訪問者の年齢を55歳以上に限定し、滞在期間も最大90日に制限した。その結果、朝鮮族の韓国への「帰郷」も容易ではなくなってしまった。韓国への入国制限とともに、朝鮮族の中には中国と韓国との物価や賃金の格差から、中国の漢薬材を韓国で販売することや出稼ぎを目的として、様々な方法で韓国に入国する者が増え始めた。そのような流れの中で、不法販売者や不法滞在者が増加するとともに、韓国政府は朝鮮族に対する入国審査を厳しくし、滞在期間もさらに制限していた。韓国メディアで在留資格違反として取り締まりの対象となった朝鮮族に関する報道が続出する中、朝鮮族は韓国社会で「不法滞在者」や「出稼ぎ外国人労働者」としてカテゴリー化された。

朝鮮族の韓国での合法滞在期間の延長をめぐって、朝鮮族の人々と韓国の市民団体は韓国政府に対して抗議を行い、2003年の蘆武玄前大統領のソウル朝鮮族教会への訪問をきっかけに、2007年に就業訪問制度が正式に実施された。就業訪問制度によって、中国朝鮮族の韓国への入国制限が大きく緩和され、韓国での滞在期間も最大５年に拡大された。韓国に親戚をもたない無縁故朝鮮族の韓国への入国もより容易になり、不法滞在者も一定の条件が揃えれば、合法滞在者への身分転換が可能になった。この時期以降、韓国メディアでは「朝鮮族不法滞在者」や「朝鮮族」という用語の使用が減りつつあり、

朝鮮族を指す言葉として「中国同胞」や「韓国系中国人」という用語の使用が増えるようになった。

近年韓国社会で朝鮮族に対する呼称としてよく使われているものは、「朝鮮族」、「僑胞」、「中国同胞」、「韓国系中国人」等がある。現地の韓国人は一般的に朝鮮族を「朝鮮族」あるいは「僑胞」と呼ぶ場合が多い。「朝鮮族」は学術用語としてもよく使われているが、社会的に差別用語として使用される場合もある。「中国同胞」という言葉は、在外同胞との繋がりを強調する市民団体や一部の学者、そしてメディアで主に使われている[7)]。「韓国系中国人」という言葉は、出入国管理局の統計データで朝鮮族を指す言葉として使われ始め、最近メディアの報道記事にもよく使われている。

以下では、韓国社会において「朝鮮族」と「中国同胞」という用語をどのように区別して使用し、朝鮮族の人々はそれをどのように受け入れているのか考察する。韓国におけるあるNGO団体の代表者の発言から見てみよう。

> 中国から朝鮮族同胞がたくさん来ることで、韓国社会における在外同胞に対する関心が高まりました。最初は「僑胞」という言葉が多く使われていましたが、在外同胞法が制定されてから、概念上で「僑胞」から「同胞」のほうに移ってきました。（中略）韓国社会で「中国同胞」と呼んだ時の眼差しと「朝鮮族」と呼んだ時の眼差しには違いがあります。「中国同胞」は「私たちと一緒」を意味しますが、「朝鮮族」という言葉には、見下したり、異質さがあるという意識が表われています。（2009年８月６日のインタビュー）

すなわち、「同胞」という言葉は韓国人にとって「われわれ」の一員として受け入れることを意味する。けれども、「朝鮮族」という言葉には「他者」として排除する意味が含まれると言える。2010年１月21日の韓国の聯合ニュースでは「『朝鮮族』の代わりに『中国同胞』と言いましょう」[8)]という題目の記事が載せられ、内容としては韓国の国立国語院により日常に使用する言語表現の中で人を差別する言葉に対し、その代案を示したものである。その記事の中で、「朝鮮族」と「中国同胞」という言葉の使用に関して、以下のように指摘されている。

> （国立国語院は）「朝鮮族」、「未亡人」等何気なく使用する言葉が場合によって相手を差別する意味で通用されることもある点を指摘し、ほかの

言葉を使用することを提案した。特に、「朝鮮族」という言葉は中国にあるいくつかの少数民族の中でわが民族とほかの民族を区分する際に使う言葉で、「中国同胞」や「在中同胞」がもっと望ましい表現であると説明した。

中国朝鮮族は中国において自分たちを指す「朝鮮族」という名称をほとんど抵抗なく受け入れたと見られるが、韓国では上記に指摘されているように差別用語としてとらえる場合があり、朝鮮族にとっては受け入れがたいものになっている。したがって、そこではアイデンティティの葛藤や抵抗が生じる。韓国人に対して「我々を『僑胞』や『同胞』と呼んでほしい」と希望する朝鮮族が増えている一方、「韓国人に私たちを『僑胞』、『同胞』と呼ぶよりは、『朝鮮族』と呼んでほしい」と差別用語を積極的に用いることで、韓国人との境界を顕在化させることもある。

次に、第二の課題である朝鮮族が韓国で経験した言語摩擦についてみていこう。韓国に「帰郷」した中国朝鮮族の中には、中国において漢語と朝鮮語の二言語教育を受け、日常生活において朝鮮語を第一言語としてきた人たちが多い。特に、朝鮮語を第一言語とする多くの中高年の朝鮮族の韓国への移動は、言語が通じるということが重要な原因に挙げられる。しかし、彼らが維持してきた「民族語」は必ずしも「帰郷」先の韓国において同じ言葉として受け入れられるわけではない。むしろ彼らが「韓国人とは異なる」と判断される一つの指標にもなっている。

中国朝鮮族の中には、朝鮮半島から中国へ移住した当時、慶尚道（現在の韓国に属する）、平安道（現在の北朝鮮に属する）、咸鏡道（現在の北朝鮮に属する）等の出身者が多く、彼らはそこで学んだ言語を中国へ持ち込んでいった。したがって、朝鮮族の朝鮮語は移住初期から地方語という特徴を有し、さらにその言語が中国語の語彙及び言語表現等の影響を受け、現在の朝鮮語を形成している。中国と韓国の国交が断絶された40余年の間（第二次世界大戦後～1992年）に、韓国語は韓国内での国家言語の統一（多くの地方語の統一）が進行した。さらに、英語や日本語等の外国語の影響を受け、語彙だけでなく、文字の表記やアクセントにおいて、さらにファッショナブルな言語として変容した。そして、韓国語は社会的な上下関係を明確に区分するための言語表現が発達し、それは朝鮮族の使用する朝鮮語と少し異なる点である。けれども、韓国語と中国の朝鮮語には規範文法の用語と規範文法の内容において、相違点より共通点が多い（イ 2008, p.65）。

宮岡（1996）は「同一民族内でも、社会的変種や地域的変種（方言）、限られた集団でのみ使用される特定の語彙やことば遣いなどは、ときに隠語的あるいは秘教的な魅力をそなえて連帯感と帰属意識をたかめ、それぞれの集団をまとめあげるはたらきをする。（中略）その一方で、このような社会化の大きな力である言語や方言は、社会的差別や心理的コンプレックスを生むという直接的な機能をもつ」（p.37）と指摘している。朝鮮語と韓国語の「差異」は、言語の差異だけでなく、韓国社会における朝鮮語への「差別」という社会的文化的な構造をも生み出した。そして、このような「差別」によって、朝鮮族の人々は韓国語へのコンプレックスを抱くようになった。

公の場において朝鮮語の「なまり」を克服する努力と「朝鮮族」であることを隠す朝鮮族が増えはじめた。「完璧な韓国語を学びたい。でも、よくできない。昔の朝鮮語のなまりはずっと残っている」とし、プライベートな場においては、自分の「なまり」がある朝鮮語を使うのを好んでいるが、公の場においては、朝鮮語の「なまり」を隠して韓国語の使用に努力を惜しまない朝鮮族が年齢や学歴に限らず多く見られた。特に、子どもがいる朝鮮族の若年層からは、子どものために朝鮮語の「なまり」を直したいという発言も聞かれた。

朝鮮語と韓国語の間の言語摩擦は、朝鮮族の韓国への移動初期において顕著に現れ、それによって「朝鮮族」というカテゴリーが明確になった。しかし、朝鮮族の中には韓国に長期滞在する者が多く、彼らは日常において韓国語に接するため、朝鮮語の使用が徐々に少なくなり、その「なまり」も目立たなくなった。したがって、朝鮮語と韓国語の境界も曖昧になっている。だが、韓国社会の眼差しは朝鮮族が使用する朝鮮語に対して必ずしも肯定的でなく、そのため朝鮮族はこれまで「民族語」維持のために努力してきたことに疑問を持ち始めた。このような朝鮮語維持に対する朝鮮族の意識変化は、彼らの次世代の朝鮮語の習得に影響が及ぶと考えられる。

３．高学歴朝鮮族のアイデンティティの再構築

韓国社会では、３Ｋ業種等の単純肉体労働に従事している中国朝鮮族に対して、「外国人出稼ぎ労働者」としてカテゴリー化し、「他者」として排除することがよく見られた。しかし、専門職に従事する高学歴者の朝鮮族に対しては、一般的に「同胞」や「韓国人」として受け入れることが筆者の現地調査から明らかになった。この場合の「韓国人」という用語は、国民的帰属意識

を意味するよりは、「韓民族」という「民族」的な帰属意識を強調するものであり、仲間意識を指すものである。

中国において、朝鮮語や朝鮮族の伝統文化を維持・継承してきた朝鮮族、その中でも朝鮮語を第一言語とする朝鮮族の人々にとって、「帰郷」として移動した韓国において「中国人」として排除される経験は、これまで思い描いてきた「故郷」のイメージの崩壊につながる。したがって、彼らは自分たちが「韓国人」ではなく、「中国人」であることを確認させられる。このようなアイデンティティの変化は、高学歴者の朝鮮族の中でもよく見られる。

韓国では学歴が人びとの所得を左右する傾向が強く（尹 2010, p.6）、高学歴者は高所得者になるという意識が韓国社会で一般的である。朝鮮族の中でも高学歴者は韓国での社会的地位の上昇が比較的に容易であり、大手企業や大学への就職の道が開かれている。彼らには、朝鮮族の単純肉体労働者への社会的な排除の眼差しはあまり見られず、積極的な受け入れが見られた。そのような受け入れに対して、朝鮮族の人々は自分をどのように規定しているのだろうか。以下においては、朝鮮族の高学歴者の事例を通じて、彼らのアイデンティティの変化に関して考察する。

> 事例１　Ｓさん、女性、30代、朝鮮族３世、専門職、韓国で修士課程と博士課程を修了
>
> 私は中国にいた時は、自分のエスニック・アイデンティティについて悩んだことがなかった。韓国にきてから３年目までは自分が「中国人」だと思い、自分に「私は中国人だ」と言い続けてきました。しかし、心のどこかで「私は完全な韓国人でもなく、完全な中国人でもないような気がする」と悩んでいました。けれども、韓国での滞在が４～５年目になると、だんだん「私は中国人なのか。韓国人にもっと近いじゃない。私はもう考え方まで韓国人によく似ている」と思い始めました。私はもう考え方とか生活習慣まで全部韓国人のようになっているような気がします。そして、私が韓国人と結婚することによって、そういう考えがもっと強くなってきたと思います。（Ｓさん、2007年３月６日のインタビュー）

Ｓさんは、中国にいた時は中国国籍を有している中国人であると同時に少数民族としての朝鮮族である二重のアイデンティティを矛盾なく維持してきた。しかし、彼女が韓国に移動した時に、「中国人」なのか「韓国人」なのかのアイデンティティの二者択一の葛藤を経験することになる。Ｓさんは、中

国にいた時は朝鮮族の集住する村で生活をし、漢族との接触も少なかった。ライフスタイルも「中国式」とは少し異なる朝鮮族の独特のライフスタイルを維持してきた。さらに、韓国に留学し、現地での長年の生活と韓国人男性との結婚によって、彼女は自分のライフスタイルが「韓国式」になっていることに気づく。したがって、彼女の帰属意識は「中国人」から「韓国人」へと変化していく。しかし、彼女のアイデンティティはそこで定まるものではなく、その後も絶えず変化をもたらし、上記の2007年のインタビューから３年後の2010年に再びインタビューを行った時、彼女は次のように語った。

> 周りの韓国人たちは私を「韓国人」として見ているようですが、私は自分がやはり「外国人」だと思います。つまり、「朝鮮族」で「中国人」だということです。子どもを産んで国籍を換えたら変わるかもしれませんが、今は自分が「韓国人」だと思いません。私はただ、韓国人たちと学び合いながら、朝鮮族の中に私のように誠実で最善を尽くす人もいることを見せたいです。（Ｓさん、2010年10月22日のインタビュー）

この事例からは、高学歴者のＳさんが韓国社会において「韓国人」として受け入れられることが見られる。しかし、３年前には自分の考え方や生活習慣が「韓国人のようになっている」と述べたＳさんが、なぜ自分のアイデンティティを「外国人」で「朝鮮族」、そして「中国人」だと捉えかえしているのか。ここには、社会的要因が作用していることが見られる。Ｓさんの「朝鮮族の中に私のように誠実で最善を尽くす人もいることを見せたい」という発言から、韓国社会で朝鮮族に対する否定的なイメージが一般的であると言えよう。Ｓさんの「中国人」と「朝鮮族」意識が再び強くなっているのは、このような韓国社会における朝鮮族への排除の眼差しに対する一種の抵抗意識だと考えられる。そして、Ｓさんから見られるのは韓国社会における朝鮮族のイメージを変えるためには、自分を肯定的にとらえること及び自らの努力によって韓国人に認められることであった。

下記の高学歴朝鮮族の事例からも、周りの韓国人から「韓国人」として見られていながら、本人は「朝鮮族」としてのアイデンティティにこだわることが見られる。

> 事例２　Ｊさん、男性、30代、大手企業の社員、韓国で修士課程を修了
> 私は今の会社で、ほかの部署の同僚から「なぜ中国語がそんなに上手な

の？」と聞かれたことがあります。私が「中国人」であることを相手が知った後は、またなぜ韓国語がそんなに上手なのかと聞かれました。周りの韓国人は私のことを「朝鮮族」ではなく、「韓国人」として見ているようです。韓国人の知人の中には「あなたは中国人じゃなくて、韓国人だよ」と言う人が多いです。でも、私は自分がやはり「朝鮮族」で「中国人」だと思います。国籍を変えるとして自分が「韓国人」になれるとは思いません。将来北京に定住するつもりなので、現地で家も購入してあります。（J さん、2010年１月20日のインタビュー）

上記の二つの高学歴朝鮮族の若年層の事例から、韓国における「他者」に対する社会的包摂には限界があることが言えよう。「韓国人」というカテゴリーが国籍による韓国国民を指すものではなく、「民族」の同一性を指す言葉であるならば、中国で使われている「中国朝鮮族」という名称のように、「韓民族」を意味する「韓国人」と中国国民を指す「中国人」の間で矛盾が生じないこともあるだろう。朝鮮族の人々はこのような環境の中で、上記の二つの事例に見られるように協調と抵抗を行いながら自分たちのアイデンティティを構築していく。上記のような抵抗意識は、朝鮮族の非高学歴者の中でもよく見られるが、彼らに見る違いは「韓国人になる」ことが達成できなかったことから、自ら「中国人」あるいは「朝鮮族」であることを肯定的に捉えようとすることである。

このような抵抗や妥協の行為に関して、例えば田辺（2003）は「アイデンティティとはコミュニティの理念や規則、あるいはその中心となるモデルへの一方的な同一化あるいは協調によって形成されるのではない。むしろ、その中心性に対する抵抗や妥協、あるいは交渉という相互作用によって、アイデンティティははじめて具体的な形をとって現れると考えられる」（p.222）と指摘している。その「コミュニティの理念や規則、あるいはその中心となるモデル」は何を指すのかに関する議論が必要であるが、稿を改めて論じたい。

むすび

朝鮮族の韓国への移動は、「帰郷」の安らぎを期待していたものである。ところが、彼らは「帰郷」先において、必ずしも長年の移民生活に対する「帰郷」の安らぎを感じることはできなかった。

本稿では、言葉に焦点にあてて議論してきた。朝鮮族は中国で長年維持し

てきた朝鮮語が、韓国においては彼らが「韓国人」でないことを証明する一つの指標になり、場合によって差別を伴うことに気づく。そして、朝鮮族は自分たちが韓国で「外国人出稼ぎ労働者」や「中国人」、「朝鮮族」、「僑胞」、「中国同胞」等多様にカテゴリー化されているが、それぞれのカテゴリーは韓国社会の彼らに対する排除や受け入れを意味するものと認識するようになった。例えば、高学歴朝鮮族は韓国において「同胞」として、場合によっては「韓国人」として受け入れられるが、単純肉体労働に従事する朝鮮族は「外国人出稼ぎ労働者」や「中国人」として社会的に排除されることである。

「朝鮮族」という名称も、朝鮮族の人々が中国においては自分たちを指す言葉としてほとんど抵抗なく使われてきたが、韓国においてはそれが差別の意味が含まれる場合もあるため、朝鮮族にとって受け入れがたいものになっている。そして、「帰郷」として移動した韓国において「中国人」として排除される経験は、これまで思い描いてきた「故郷」のイメージの崩壊につながる。したがって、朝鮮族の人々は自分がどこに帰属するのかというアイデンティティの葛藤を抱くようになり、「中国人」なのか「韓国人」なのか苦しむ中で、彼らは自分たちが「中国人」であることを自覚させられる。本稿によって、高学歴朝鮮族の若年層は「中国人」そして「朝鮮族」としてのアイデンティティを再構築し、自らこのような差別用語を積極的に用いることで、アイデンティティの抵抗を行うことが明らかになった。

高学歴朝鮮族の若年層は、韓国への「帰郷」によって、アイデンティティは常に変わるものであることに気づいた。高学歴を有するある朝鮮族は、アイデンティティが移動先によって変化することを次のように語る。「韓国にいる時は、自分の『中国人』意識が強くなるが、中国に帰ると、今度は自分の『朝鮮族』あるいは『韓国人』意識が強くなると思う」。このように、複数のアイデンティティを有している朝鮮族にとって、それぞれのアイデンティティが相互交渉によって、どのアイデンティティが強化されるかにより、彼らの「帰郷」先も変わるし、「帰郷」の意味も変わっていくのではないだろうか。朝鮮族のアイデンティティの変容は、彼らを取り巻く人々との相互関係の中で構築され、常に変化するものである。

〔注〕

1）大川真由子　2010『帰還移民の人類学―アフリカ系オマーン人のエスニック・アイデンティティ』明石書店、p.20

2）移住の起点となった国、移民を送り出した国を指す。

3）中国朝鮮族の北朝鮮への移動に関する統計データが管見の限りではないため、本稿では北朝鮮に関しては扱わない。

4）中華人民共和国国家統計局 第五回人口統計データ
http://www.stats.gov.cn/tjsj/ndsj/renkoupucha/2000pucha/html/t0201.htm（アクセス：2011年６月14日）

5）本稿で用いる「朝鮮語」は主に、中国において少数民族としての朝鮮族が使用する「民族語」を指す。本稿での「韓国語」は、韓国の国家言語であり、ソウル語を中心とする標準語を指す。

6）韓国法務部出入国・外国人政策本部ホームページ
http://www.immigration.go.kr/HP/TIMM/index.do?strOrgGbnCd=104000 （アクセス：2011年６月10日）

7）박광성 2006『세계화시대 중국조선족의 노동력이동과 사회변화』（グローバル化時代の中国朝鮮族の労働力移動と社会変化）서울대학교 대학원 사회학박사학위논문 p.172

8）聯合ニュース2010年１月21日記事
http://news.naver.com/main/read.nhn?mode=LSD&mid=sec&sid1=103&oid=001&aid=0003084804（アクセス：2011年６月20日）

〔参照文献〕

ベネディクト・アンダーソン著、白石隆・白石さや訳　2007『定本　想像の共同体―ナショナリズムの起源と流行』書籍工房早山

白石さや　2009「エスニック・アイデンティティ再考：アチェ語の教科書を読む」『アジア教育』第３巻、アジア教育学会、pp.1－31

平野健一郎　2000『国際文化論』東京大学出版会

大川真由子　2010『帰還移民の人類学―アフリカ系オマーン人のエスニック・アイデンティティ』明石書店

田辺繁治　2003『生き方の人類学―実践とは何か』講談社

趙貴花　2008「グローバル化時代の少数民族教育の実態とその変容：中国朝鮮族の事例」『東京大学大学院教育学研究科紀要2007』第47巻、pp.177－187

宮岡伯人編　1996『言語人類学を学ぶ人のために』世界思想社

尹敬勲　2010『韓国の教育格差と教育政策：韓国の社会教育・生涯教育政策の歴史的展開と構造的特質』大学教育出版

권태환・박광성(グォンテフアン・パクグアンソン) 2005「한국 조선족 노동자 집단의 형성－심층면접 자료의 분석」（韓国における朝鮮族労働者集団の形成―インタビューデータの分析）권태환편저『중국조선족 사회의 변화－1990년 이후를 중심으로』（中国朝鮮族社会の変化―1990年以降を中心に）서울대학교출판부 pp.147-175

이주행（イズヘン）2008「중국 조선어와 한국어의 비교 연구－규범문법을 중심으로」（中国朝鮮語と韓国語の比較研究―規範文法を中心に）강용택 주필『한국（조선）언어문학연구 국제학술회의 논문집』（韓国［朝鮮］言語文学研究　国際学術会議　論文集）북경: 민족출판사 p.39-67